

令和5年度
シラバス

(講義・実習)

(2023年4月～2024年3月)



1 学年

茨城歯科専門学校 歯科衛生士科

歯科衛生士科

入学者の受け入れ方針（アドミッションポリシー）

歯科衛生士の専門職を目指そうとする、以下のような資質を備えた人を求めています。

- 1 歯科衛生士になりたいという強い意志を持つ人
- 2 歯科衛生学の修得に必要な基礎学力を有する人
- 3 協調性と思いやりを持って行動できる人

卒業認定・称号授与方針（ディプロマポリシー）

本校所定の単位を取得し、以下の能力を身につけた者を卒業認定し、専門士（医療専門課程）の称号を授与します。

- 1 高い倫理観を持ち、歯科衛生学の基本的な知識と技術を身につけ専門職としての責務を果たすことができる。
- 2 科学的根拠を持って歯科保健活動を行うとともに、多職種とのコミュニケーションのもと地域の保健・医療・福祉に貢献することができる。
- 3 生涯を通じて自己研鑽し資質向上を目指すことができる。

目 次

1 学年

(人文科学)		(歯科放射線学)	
手話	1-1	歯科放射線学	1-35
(自然科学)		(歯科保存学)	
生物学	1-3	保存修復学	1-37
(解剖学)		歯内療法学	1-39
人体解剖学	1-5	歯周治療学	1-41
組織・発生学	1-7	(歯科補綴学)	
(生理学)		歯科補綴学	1-43
生理学	1-9	(口腔外科学)	
(生化学)		口腔外科学	1-45
生化学	1-11	(小児歯科学)	
(口腔解剖学)		小児歯科学	1-47
口腔解剖学	1-13	(矯正歯科学)	
歯牙解剖学 I	1-15	歯科矯正学	1-49
歯牙解剖学 II	1-17	(歯科予防処置論)	
(病理学)		歯科予防処置論	1-51
病理学	1-19	歯科予防処置論 I 実習	1-53
(微生物学)		う蝕予防処置論	1-57
微生物学	1-21	う蝕予防処置論実習	1-59
(薬理学)		(歯科保健指導論)	
薬理学	1-23	歯科保健指導論 I	1-61
(口腔衛生学)		歯科保健指導論 I 実習	1-63
口腔衛生学 I	1-25	(歯科診療補助論)	
公衆歯科衛生学	1-27	歯科診療補助論 I	1-65
(衛生学)		歯科診療補助論 I 実習	1-67
衛生学	1-29	(高齢者歯科学)	
(歯科衛生士概論)		高齢者歯科学	1-71
歯科衛生士概論	1-31		
(歯科臨床概論)			
歯科臨床概論	1-33		

授 業 科 目	手話（講義） 必修 24時間（後期）	担当教員	山田 みき子
授業目標・教育方針と概要	<p>手話表現としては、あいさつ・自己紹介、簡単な日常会話ができるようにする。さらに、治療現場で使えるような表現も習得する。</p> <p>手話という言語を学ぶことを通して、より良いコミュニケーションとはどういうことなのかを学ぶ。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 聴覚障害および聴覚障害者について理解する。 2. 手話で意思表示をし、相手の言いたいことも理解する。 3. 聴覚障害者とのコミュニケーションをとる。 4. 様々な人が来る歯科医院で、「その人にとっての心地良いコミュニケーション」をとるためには、どのような配慮が必要なのかを思考する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 手話とは 自分の名前を覚えよう</p> <p>第 2 回 名前を紹介しましょう</p> <p>第 3 回 家族を紹介しましょう</p> <p>第 4 回 数字を使って話しましょう</p> <p>第 5 回 復習・講義</p> <p>第 6 回 趣味について話しましょう</p> <p>第 7 回 仕事についてはなしましょう</p> <p>第 8 回 医療現場で使う手話単語表現を練習しましょう</p> <p>第 9 回 住所を表してみましょう</p> <p>第 10 回 復習・講義</p> <p>第 11 回 試験対策</p> <p>第 12 回 まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回、単語、指文字・数字表現を練習し完璧に覚える。 ・テキストの DVD を使用しながら聴覚障害者の手話表現や読み取りに慣れること。 		

履修上の注意	<p>出欠は毎時間取るので無断で欠席しないこと。 わからないことは積極的に質問すること。 「手話は見ることば」です。自分の手や表情を動かすこと。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験は筆記試験と実技試験を行う。 毎回の授業態度も評価に加え、定期試験の点数から減点して、評価することもある。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果をもとに、再試験やレポート提出を課す。</p>															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p>歯科衛生士の資格取得に「手話」は直接は関係ないと思うが、手話を学ぶ事を通して、社会の中で生活している様々な人への配慮をすることについて、自ら考え行動に移す事を学んで欲しい。</p>															
教 科 書	<p>厚生労働省手話奉仕員養成カリキュラム対応 「手話を学ぼう 手話で話そう」 全国手話研修センター</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	生物学（講義） 必修 24 時間（前期）	担当教員	三輪 五十二
授業目標・教育方針と概要	<p>生物学を学ぶ目的は生物体が行う生命現象のしくみを理解することにある。生命の誕生、生命を作る細胞の成り立ちと活動、生命が連続する仕組み、生命が環境の変化に合わせて生活する仕組みを学び、人間が生きていく上で役立つ知識を習得する。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生命の定義や、地球上の生命の誕生を理解する。 2. 生命を作る細胞の成り立ちと活動を理解する。 3. 生命が連続する仕組みを理解する。 4. 生命が環境の変化に合わせて生活する仕組みを理解する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 全体の授業内容の説明、生命を作る物質 第 2 回 生命の誕生、生命の変遷 第 3 回 生命の単位—細胞、細胞を作る物質 第 4 回 細胞小器官の働き 第 5 回 細胞のさまざまな活動 第 6 回 細胞の分裂と一生 第 7 回 ヒトの組織と器官 第 8 回 減数分裂と遺伝の法則 第 9 回 遺伝子の実体と働き 第 10 回 刺激の受容と反応 第 11 回 内部環境を保つ仕組み 第 12 回 地球環境とヒトの未来、まとめ</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので無断で欠席しないこと。 分からないところは積極的に質問すること。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 400 1278 616"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 633 1406 745">毎回小テストを行い、達成目標のリストに挙げたことからの意味を理解し問題に対応して解くことができる能力をみる。小テストと定期試験の結果と合わせて成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果の状況をもとに、再試験やレポートを課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	生物学は自然科学の教養科目であるが、歯科専門学校で学ぶほとんどの科目の基礎となる科目である。															
教科書	歯科衛生学シリーズ「生物学」 医歯薬出版															
参考書																

授 業 科 目	人体解剖学（講義） 必修 20 時間（前期）	担当教員	阿部 伸一、野口 拓 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>人体解剖学は生命の尊さを認識し、人体の基本的形態を理解するとともに、各器官および病態の発現起序など他の基礎教科および臨床科目を学習するための基礎知識を深めることにあると考える。この講義では、歯科医学に必要な知識を常に念頭に置きながら、頭頸部とそれに関与する全身の正常な構造、機能ならびにその相互関係を習得する。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全身の骨に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 2. 全身の筋肉に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 3. 頭頸部の骨に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 4. 頭頸部の筋肉に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 5. 口腔と全身の関わりやその機能について学び、理解する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 解剖学総論 第 2 回 口腔の位置づけ 第 3 回 頭頸部と躯幹の骨学 第 4 回 頭頸部と躯幹の骨学 第 5 回 頭頸部と躯幹の骨学 第 6 回 頭頸部と躯幹の骨学 第 7 回 頭頸部と躯幹の筋学 第 8 回 頭頸部と躯幹の筋学 第 9 回 頭頸部と躯幹の筋学 第 10 回 頭頸部と躯幹の筋学</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので無断で欠席はしないこと。 わからないところは積極的に質問をすること。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 1406 707">定期試験では達成目標のリストに挙げた事柄とそれぞれの相互関係を理解しているかを見る。定期試験の結果で成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果をもとに、再試験やレポートを課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p data-bbox="456 976 1406 1050">歯科衛生士専門学校における基礎歯科医学、臨床歯科医学で学ぶすべての教科の基礎となる科目である。</p>															
教科書	<ol style="list-style-type: none"> <li data-bbox="456 1164 1406 1238">1) 歯科衛生学シリーズ 人体の構造と機能1 「解剖学・組織発生学・生理学」 医歯薬出版 <li data-bbox="456 1243 1406 1317">2) 歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の構造と機能 「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」 医歯薬出版 <li data-bbox="456 1321 922 1352">3) 口腔顎顔面解剖ノート 学建書院 <li data-bbox="456 1357 1118 1388">4) 基本のきほん 摂食嚥下の機能解剖 医歯薬出版 															
参考書																

授 業 科 目	組織・発生学（講義） 必修 30 時間（前期）	担当教員	橋本 貞充 鷺見 正美 (実務経験教員) 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>口腔領域は消化器官であるとともに咀嚼、嚥下、呼吸、発音など非常に複雑な機能が終結し、互いに密接な関わりを持っている領域であることから、歯牙や歯周組織などの歯原性組織や唾液腺組織などを含めた口腔組織の組織構造や特性、組織発生について幅広い知識を得る。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口腔組織構造の概要を説明できる 2. 上皮組織・結合組織を説明できる 3. 皮膚・粘膜・消化管組織を説明できる 4. 顔面と口腔の発生を説明できる 5. 歯牙の構造を説明できる 6. 歯周組織の構造を説明できる 7. 歯の発生・萌出を説明できる 8. 口腔粘膜・唾液腺を説明できる 		
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 第 1 回 組織学とは・細胞と組織 第 2 回 口腔組織構造の概要 第 3 回 上皮組織・結合組織 第 4 回 骨・軟骨組織・脈管 第 5 回 血液とリンパ・筋肉・神経 第 6 回 皮膚・粘膜・消化管組織 第 7 回 歯の構造／エナメル質 第 8 回 歯の構造／象牙質と歯髄 第 9 回 歯の構造／セメント質 第 10 回 発生学概論・顔面と口腔の発生 第 11 回 歯の発生・歯の萌出 第 12 回 口腔粘膜・舌 第 13 回 唾液腺 第 14 回 歯周組織の構造／歯肉 第 15 回 歯根膜・歯槽骨 		

履修上の注意	特になし。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>可否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="458 633 919 667">全講義終了後に筆記試験をおこなう。</p>	評 定	評価基準	可否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合格
評 定	評価基準	可否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合格														
水準に達しない学生に対する対応	本試験と同等の筆記による再試験を行う。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	口腔組織・発生学は、解剖学、組織学と共に、歯科医学の根幹をなすものである。															
教科書	<p data-bbox="458 1140 986 1173">歯科衛生学シリーズ 人体の構造と機能 1</p> <p data-bbox="837 1182 1406 1216">「解剖学・組織発生学・生理学」 医歯薬出版</p> <p data-bbox="458 1225 1023 1258">歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の構造と機能</p> <p data-bbox="671 1267 1406 1301">「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」 医歯薬出版</p>															
参考書	配布プリント等															

授 業 科 目	生理学（講義） 必修 16 時間（前期）	担当教員	山口 昌宏 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>生理学は、生体がつさまざまな機能が、どのような仕組みで行われているか明らかにする学問である。生理学の基礎的な部分である物質代謝や適応など生体が行う生命現象について学ぶ。口腔生理学は、口腔機能についてそのメカニズムを明らかにすることを目的とする。</p>		
達 成 目 標	<p>血液循環、神経系や脳の機能、呼吸や物代謝を学び、内分泌系や生殖、生命の連続性を理解する。 歯の硬組織の組成、歯周組織と咬合の生理、口腔感覚、唾液分泌を学ぶ。</p>		
授 業 計 画	<p>第1回 生理学概論 消化と吸収 第2回 血液と循環 神経系 第3回 呼吸 感覚 第4回 排泄と体温 内分泌系と生殖 第5回 歯と歯周組織の生理 咬合と咀嚼 第6回 吸引・嚥下・嘔吐・口呼吸・口臭 第7回 歯と口腔の感覚 唾液 第8回 まとめ</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので無断で欠席しないこと。 分らないところは積極的に質問すること。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="598 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 636 1406 745">定期試験では達成目標のリストに挙げたことからの意味を理解し、問題に対応して解くことができる能力をみる。定期試験の結果で成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果の状況をもとに、再試験やレポートを課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	生理学は解剖学・組織学を基礎とし、口腔、顎、顔面などの機能を健全に維持する上で基礎となる学問である。															
教科書	歯科衛生士テキスト「生理学」 学建書院															
参考書	歯科衛生学シリーズ 人体の構造と機能1「解剖学・組織発生学・生理学」 医歯薬出版															

授 業 科 目	生化学 (講義) 必修 24 時間 (前期)	担当教員	
授業目標・教育方針と概要	<p>生物体が行う生命現象を化学的な知識をもって学ぶ事にあり、栄養学の基礎ともなる。生物自体も化学物質で構成され、その化学変化によって生命現象が営まれる。講義では生体がいかに巧みなしくみで化学変化を活用し、生命現象を営んでいるかを習得する。さらに、一般生化学に基づき口腔組織についても、その詳細を学ぶ。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞・水の役割を学び、生体の構成要素と栄養素を理解する。 2. 消化・吸収、そしてエネルギー代謝を学び、それらがホルモンなどにより恒常性が維持されていることを理解する。 3. 一般生化学の基礎に基づき、口腔組織のほとんどを占める結合組織について学び、その構成成分・化学的特徴を理解する。 4. 特異的な組織である歯の構成成分・特徴、そして歯をとりまく唾液などの口腔環境について学び、口腔疾患のメカニズムについて理解し、考察する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 全体の授業内容 (シラバス) の説明と生化学概論 第 2 回 生体の構成要素 ー細胞の役割・構成成分・栄養素ー 第 3 回 生体における化学反応 ー消化、吸収・エネルギー代謝ー 第 4 回 糖質の代謝 第 5 回 脂質の代謝 第 6 回 タンパク質の代謝 第 7 回 タンパク質合成と核酸 第 8 回 生体における恒常性の維持 第 9 回 血糖値とその調節 ー 歯 ・ 口の生化学 ー 第 10 回 歯と歯周組織の生化学 ー結合組織ー 第 11 回 歯と歯周組織の生化学 ー歯の構成成分ー 第 12 回 硬組織と石灰化 歯の脱灰と再石灰化 ・ 骨の生成と吸収 唾液の生化学 プラークの生化学 (う蝕と歯周病) ・ まとめ</p>		

履修上の注意	<p>無断で欠席しないこと。 わからないところは授業の後に質問の時間を設けるので、積極的に質問すること。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験により、達成目標に挙げた事柄の意味を理解し、問題に応用して解くことができるかを判断する。定期試験の結果により、成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果を踏まえて、再試験やレポート提出を課す。</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中の位置付け	<p>生化学は基礎科目であり、栄養学の基礎ともなっている。さらに、口腔組織について化学的に学び、口腔疾患のメカニズムを理解、考察することで、口腔衛生などの臨床科目の基本的な知識となる科目である。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 人体の構造と機能2「栄養と代謝」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	口腔解剖学（講義） 必修 20 時間（前期）	担当教員	阿部 伸一、野口 拓 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>口腔解剖学は人体解剖学で学んだことを基礎として、口腔領域を扱う歯科衛生士として必須である頭頸部に関する正常な構造、機能ならびにその相互関係をより詳細に習得すること、さらに全身の知識を深める事为目标とする。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全身の神経に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 2. 全身の脈管に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 3. 頭頸部の神経に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 4. 頭頸部の脈管に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 5. 内臓に関する正常な構造や機能について学び、理解する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 頭頸部と躯幹の神経学 第 2 回 頭頸部と躯幹の神経学 第 3 回 頭頸部と躯幹の神経学 第 4 回 頭頸部と躯幹の神経学 第 5 回 頭頸部と躯幹の脈管学 第 6 回 頭頸部と躯幹の脈管学 第 7 回 頭頸部と躯幹の脈管学 第 8 回 口腔内臓学 第 9 回 摂食嚥下を理解するための基礎機能解剖 第 10 回 内臓学</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので無断で欠席はしないこと。 わからないところは積極的に質問をすること。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 1406 707">定期試験では達成目標のリストに挙げた事柄とそれぞれの相互関係を理解しているかを見る。定期試験の結果で成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果をもとに、再試験やレポートを課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	基礎歯科医学、臨床歯科医学を学んでいく上の基礎となる教科であると考ええる。															
教 科 書	1) 歯科衛生学シリーズ 人体の構造と機能1 「解剖学・組織発生学・生理学」 医歯薬出版 2) 歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の構造と機能 「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」 医歯薬出版 3) 口腔顎顔面解剖ノート 学建書院 4) 基本のきほん 摂食嚥下の機能解剖 医歯薬出版															
参 考 書	人体解剖学 1. 骨学（頭蓋） 井出吉信編（CD-ROM） 人体解剖学 2. 筋学（頭蓋） 井出吉信編（CD-ROM）															

授 業 科 目	歯牙解剖学 I (講義) 必修 16 時間 (前期)	担当教員	神田 稔 (実務経験教員) 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>解剖学は、人体の正常な構造を理解するための学問である。 解剖学を通じて人体の形を覚えると同時に、その働きを知ることも重要である。本講では歯科医学の基礎となる歯の形態を学ぶとともに、基本的な解剖学用語を覚え、以後の学科の学習に役立つ知識を得るようにする。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヒトの歯の形態と咬合関係を学ぶ 2. 基本的な解剖学の用語を覚える 3. カービングを行い、歯のもつ形態を立体的に再現できるようにする 		
授 業 計 画	<p>第1回 歯の用語 第2回 ミュールライターの3表徴 第3回 上下顎切歯 第4回 上下顎犬歯、上顎小白歯 第5回 下顎小白歯、上顎第1大臼歯 第6回 上下顎大臼歯 第7回 乳歯 第8回 歯列弓形態と咬合</p>		

履修上の注意	私語厳禁															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 620"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 1370 667">正確な知識が必要とされている学科なので、定期試験の結果で評価する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験を行う															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	全ての臨床科目の基礎となる学科なので、十分な理解が望ましい															
教 科 書	歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の構造と機能 「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」 医歯薬出版															
参 考 書																

授 業 科 目	歯牙解剖学Ⅱ (講義・実習) 必修 40 時間 (前期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	<p>解剖学は、人体の正常な構造を理解するための学問である。 解剖学を通じて人体の形を覚えると同時に、その働きを知ることも重要である。本講では歯科医学の基礎となる歯の形態を学ぶとともに、基本的な解剖学用語を覚え、以後の学科の学習に役立つ知識を得るようにする。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯の形態を理解する 2. 模型歯、抜去歯牙を用いて、ヒトの歯の形態と配列を学ぶ 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 歯牙解剖概要 第 2 回 永久歯まとめ 第 3 回 乳歯まとめ 第 4 回 説明講義 第 5 回 歯牙スケッチ① 第 6 回 " ② 第 7 回 " ③ 第 8 回 " ④ 第 9 回 歯牙鑑別実習 (歯牙模型作成・歯牙鑑別練習) ① 第 10 回 " ② 第 11 回 " ③ 第 12 回 " ④ 第 13 回 " ⑤ 第 14 回 " ⑥ 第 15 回 " ⑦ 第 16 回 " ⑧ 第 17 回 " ⑨ 第 18 回 " ⑩ 第 19 回 " ⑪ 第 20 回 " ⑫</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので、無断で欠席しないこと 分からない点は進んで質問すること															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 636 935 745">歯牙鑑別試験を実施する 実習の際の忘れ物も評価の対象となる 授業態度も加味する</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験を行う															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	専門基礎分野の基礎知識である為、十分な理解が必要である。歯科衛生士として歯冠だけでなく歯根の理解も重要である。															
教科書	歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の構造と機能 「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」 医歯薬出版															
参考書																

授 業 科 目	<p style="text-align: center;">病理学（講義） 必修 30 時間（前期）</p>	担当教員	<p style="text-align: center;">橋本 貞充、村松 敬 鷲見 正美、山本 圭 (実務経験教員) 歯科医師</p>
授業目標・教育方針と概要	<p style="text-align: center;">病理学とは全身でおきる様々な疾患について、病気の成り立ちや診断、治療、予防のために必要な歯科医療の根幹をなす学問であり、症例や画像を多用した興味を持てる授業を通して、幅広い知識を修得する。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 病気の原因（内因・外因）を説明できる 2. 循環障害を説明できる 3. 組織の代謝障害（退行性病変）を説明できる 4. 組織の増殖と修復（進行性病変）を説明できる 5. 炎症・免疫を説明できる 6. 腫瘍を説明できる 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 病因論・遺伝疾患、奇形 第 2 回 代謝障害 第 3 回 増殖と修復 第 4 回 循環障害 第 5 回 炎症－1 第 6 回 炎症－2 第 7 回 免疫 第 8 回 腫瘍－1 第 9 回 腫瘍－2 第 10 回 齶蝕の概説 第 11 回 歯髓の病変の概説 第 12 回 歯周組織の病変の概説 第 13 回 口腔粘膜病変・口腔腫瘍の概説 第 14 回 病理学実習／擦過細胞診－1 第 15 回 病理学実習／擦過細胞診－2</p>		

履修上の注意	特になし。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 400 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 919 667">全講義終了後に筆記試験をおこなう。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	本試験と同等の筆記による再試験をおこなう。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p data-bbox="456 916 1406 1032">関連する授業の中での位置づけ：病理学は、解剖学、組織学、生理学などの基盤の上で、様々な病変を理解するものであり、歯科臨床と密接に関連する。</p>															
教 科 書	<p data-bbox="456 1178 1402 1252">歯科衛生学シリーズ 疾病の成り立ち及び回復過程の促進1「病理学・口腔病理学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書	配布プリント等															

授 業 科 目	微生物学（講義） 必修 32 時間（後期）	担当教員	齋藤 真規、栞原 紀子 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>微生物学とは、肉眼では見ることのできない微生物によって生じる「感染症」の成り立ちを知る学問である。講義では医学領域で重要な病原微生物および宿主の防御能力（免疫力）について学ぶ。さらに口腔二大疾患であるう蝕と歯周病に関連する病原微生物について学び、歯科衛生士にとって必要な知識を習得することを目標とする。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 微生物学の歴史について説明できる。 2. 感染と発症について説明できる。 3. 微生物およびウイルスの基本的構造と感染症を説明できる。 4. 宿主の防御機構について説明できる。 5. 滅菌と消毒の違いを説明できる。 6. 化学療法を説明できる。 7. アレルギーの分類と発症機序を説明できる。 8. 口腔細菌叢について説明できる。 9. 口腔二大疾患関連微生物とその病原性について説明できる。 10. 全身疾患と口腔細菌との関連性について説明できる。 		
授業計画	<p>第 1 回 微生物学の歴史・感染と発症 第 2 回 細菌の構造と機能・増殖様式 第 3 回 病原微生物①（グラム陽性球菌・グラム陽性桿菌） 第 4 回 病原微生物②（グラム陰性球菌・グラム陰性桿菌） 第 5 回 病原微生物③（スピロヘータ他） 化学療法 第 6 回 滅菌・消毒 第 7 回 ウイルスの構造と機能・増殖様式 ウイルス感染症① 第 8 回 ウイルス感染症② 第 9 回 【中間試験】 範囲：第 1 回～第 8 回 真菌・原虫の構造と感染症 第 10 回 免疫① 免疫の概念・自然免疫 第 11 回 免疫② 獲得免疫（液性・細胞性免疫） 第 12 回 免疫③ アレルギー反応の分類と発症機序 第 13 回 口腔細菌叢 第 14 回 口腔感染症①（う蝕） 第 15 回 口腔感染症②（歯周病） 第 16 回 口腔に特徴的症状を示す感染症 全身疾患と口腔細菌との関わり</p>		

履修上の注意	<p>事前に教科書を読み予習しておくこと。 出席は毎時間取るので無断で欠席しないこと。 分からないところは積極的に質問すること。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 398 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p>達成目標の到達度を評価するために中間試験（50 点）および定期試験（50 点）を課す。その合算で成績を評価する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>試験の結果の状況をもとに、再試験やレポートを課す。</p>															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p>微生物学は感染症（う蝕・歯周病を含む）の原因について学ぶ学問であり、歯科衛生士にとって口腔疾患の予防や保健指導のうえで必要不可欠な教科である。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 疾病の成り立ち及び回復過程の促進 2 「微生物学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	薬理学（講義） 必修 16 時間（前期）	担当教員	上濱 正 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>薬理学の目的は、病気を治すという臨床医学の分野を学び、薬物を安全に使用して健康に寄与することである。この講義では、身体がどのように機能し、薬物を投与した時に起こる変化、薬物を安全に使用する知識を学び、歯科医師と歯科衛生士との間の安全チェック機構を習得する。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬理学の意義を学び、その作用機序を理解する。 2. 医薬品について学び、剤形、処方せん、調剤の内容を理解する。 3. 各種の薬物の作用機序、特徴、副作用を学び、臨床の場で適切に応用できる。 		
授 業 計 画	<p>第1回 総論；薬理学の意義ほか 第2回 総論；薬物の併用、有害作用ほか 第3回 総論；医薬品、剤形ほか 第4回 中枢神経に作用する薬物 第5回 末梢神経系に作用する薬物 第6回 呼吸・循環器系に作用する薬物、止血剤 第7回 抗炎症薬、ビタミン・ホルモン 第8回 病原微生物に作用する薬剤 歯科疾患の回復を促進する薬物 服薬指導</p>		

履修上の注意	<p>出席は毎時間取るので無断で欠席しないこと わからないところは積極的に質問すること 予習、復習に努めること</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 405 1281 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>可否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験では達成目標のリストに挙げたことからの意味を理解し、問題に応用して解くことができることをみる。定期試験の成績、授業態度、授業中の質疑応答などを総合的に評価して成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	可否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	可否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果の状況により、追試験やレポートを課す。</p>															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p>薬理学は基礎教育科目であり、歯科専門学校で学ぶ重要な一分野である。多くの関連する科目（薬剤・薬品などを使用する科目）がありその関連性も教育する。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 疾病の成り立ち及び回復過程の促進 3 「薬理学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	口腔衛生学Ⅰ（講義） 必修 24時間（後期）	担当教員	山口 將日 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>う蝕と歯周病を予防・進行停止するための知識や技術をある程度われわれは手にしているにもかかわらず、国民はその恩恵を十分に享受しているとはいえない。歯科衛生士はそうした医療を患者さんへ提供する主役である。口腔衛生学Ⅰ及び3年生で履修する口腔衛生学Ⅱでは、そうした医療の基礎となる知識やコミュニケーションスキルを伝え歯科衛生士として社会に貢献できる人となれるよう授業を行う。また、授業全体を通して、学生ひとりひとりの「こころ」に火を灯せるよう授業を行いたい。『歯科衛生士としての未来に希望を感じ、専門職としてがんばっていこう』という「こころの芽」が育つように。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. カリオロジーを学び、その概念を理解する 2. 患者さんへの説明、接し方を体験する 		
授 業 計 画	<p>第1、2回 歯科衛生士の仕事 第3、4回 カリオロジー総論 第5、6回 カリオロジー各論1（歯ブラシ、唾液、シーラント、食生活指導、フッ化物、リスクコントロールプログラム立案） 第7、8回 カリオロジー各論2（う蝕の治療） 第9、10回 ペリオドントロジー各論（リスクファクター：タバコ） 第11、12回 時間があればその他（TMD、口臭、舌痛症、非定型歯痛・がん・不正咬合）</p>		

履修上の注意	スライドとプリントによる授業。授業中、携帯で撮影原則可。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 636 1401 707">テスト【テストは、授業中に行う小テストやワークシート、国試問題などから出題。テスト時は、授業中に配るプリントなど一切持ち込み禁止】</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	レポートや再テスト															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	極めて臨床的な学習内容です。また、国試試験を意識して、取り扱うテーマでどのような問題が出ているかも確認していきます。															
教 科 書	授業中に紹介															
参 考 書																

授 業 科 目	公衆歯科衛生学（講義） 必修 32 時間（後期）	担当教員	杉原 直樹 佐藤 涼一 岩崎 美友 (実務経験教員) 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>包括的な保健・医療・福祉（介護）を理解し、保健医療の分野における公衆歯科衛生学の重要性を理解する。公衆歯科衛生学の知識を身につけ、歯科衛生士として地域における保健・医療・福祉（介護）の活動の中で、たえず思考し、広い視野と社会的洞察力で展開できる能力を習得する。地域保健活動における計画・立案に参画でき、医療職・行政官・ケースワーカー・住民組織などと協調し、地域における組織活動に携わることができること。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国際的な規模から日本国内における保健・医療・福祉（介護）のシステムを理解する。 2. 公衆歯科衛生に関連する法律を理解する。 3. ライフステージで行われている口腔保健活動を理解する。 4. 地域における口腔の維持増進のための方法を説明する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 公衆歯科衛生学概論 1 公衆歯科衛生学とは 疾病の自然史と予防の概念</p> <p>第 2 回 公衆歯科衛生学概論 2 PHC とヘルスプロモーション 健康教育とエンパワメント 地域保健法、健康増進法</p> <p>第 3 回 母子保健 1 母子保健に関連する基本的事項、母子保健法</p> <p>第 4 回 母子保健 2 日本における母子保健 1 歳 6 か月児および 3 歳児歯科健康診査</p> <p>第 5 回 学校保健 1 学校保健の領域構造、学校保健安全法</p> <p>第 6 回 学校保健 2 学校における健康診断と学校歯科保健</p> <p>第 7 回 学校保健 3 学校歯科保健：定期健康診断（歯・口腔）</p> <p>第 8 回 成人歯科保健 1 口腔保健行動、口腔と全身との関係</p> <p>第 9 回 成人歯科保健 2 歯周疾患検診、8020 運動</p> <p>第 10 回 産業歯科保健 労働安全衛生法、健康診断、THP 歯科に関連する特殊健康診断</p> <p>第 11 回 高齢者歯科保健 1 老人の医療・保健・介護</p> <p>第 12 回 高齢者歯科保健 2 高齢者の歯科保健事業</p> <p>第 13 回 障害者歯科保健 ICF、ノーマライゼーション、 日本の障害者対策</p> <p>第 14 回 災害時歯科保健 救急医療、災害医療</p> <p>第 15 回 国際歯科保健 国際協力とは、国際保健医療協力の状況、 WHO、国際協力機構</p> <p>第 16 回 期末試験対策・まとめ</p>		

履修上の注意	<p>○毎回、講義用プリント（配布）あるいはノートに講義内容を記録すること。</p> <p>○配布した講義プリントは毎回必ず持ってくること。</p> <p>○講義用プリントは定期的に回収し、点検する。</p> <p>○分からないところは講義中あるいは講義後に質問すること（時間内で問題を解決し理解すること）。</p> <p>○講義用配布プリントは、各自定期試験まで保存しておくこと。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 472 1283 685"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>○授業態度（講義ノート提出）および定期試験（筆記試験）</p> <p>○講義ノートを提出しない者は、未提出の回数によって成績を減点する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>講義ノート提出および定期試験の結果、基準（60％）に達しない者について再試験を課す。</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中の位置付け	<p>専門基礎分野として、保健医療の分野において、公衆歯科衛生学は重要となる。関連する科目（衛生学、衛生行政、社会福祉、口腔衛生学、衛生統計学、歯科予防処置、歯科保健指導、口腔保健管理）も理解すること。</p>															
教科書	<p>歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の健康と予防に関わる人間と社会の仕組み1「保健生態学」 医歯薬出版</p>															
参考書	<p>国民衛生の動向 2021 / 2022 （購入の必要はありません。必要な部分は講義中に配布）</p>															

授 業 科 目	衛生学（講義） 必修 20 時間（後期）	担当教員	齊藤 具子
授業目標・教育方針と概要	<p>歯科衛生士の働く分野は、衛生・公衆衛生の分野であり、近年その領域での活躍が期待されている。本講義では、予防医学の観点から健康の維持増進を図る知識と技術を学ぶ。また、集団における健康に係る研究手法（疫学）や感染症対策、食中毒予防に関する組織化された保健活動にも重点をおきながら、公衆衛生の基礎を学ぶ。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 公衆衛生の意義や目的、政策等の基礎の理解 2. 疫学を中心とした健康問題の集団的分析方法の習得 3. 各種衛生統計、保健指標の現状と動向の把握 		
授 業 計 画	<p>第1、2回 ガイダンス及び総論、健康の定義</p> <p>第3、4回 予防医学と健康増進対策 プライマリケアとヘルスプロモーション、健康日本21（第2次） 生活習慣病</p> <p>第5、6回 感染症 感染症とは、感染症予防、院内感染対策</p> <p>第7、8回 人口に関する統計 人口ピラミッド、人口動態統計、平均寿命・健康寿命 疫学の定義及び概要・疫学研究の方法論 疫学とは、横断的研究、コホート研究、患者対照研究</p> <p>第9、10回 生活環境と健康 外部環境と内部環境、地球環境保全、廃棄物処理 食品と健康 食品保健、食中毒の防止、栄養摂取基準</p>		

履修上の注意	<p>講義形式だけでなく、ペアワークやグループワークを実施することがある。自らの体験や考えを出発点として、講義内容への理解を深めてもらいたい。そのため、授業への主体的かつ積極的な聴講の姿勢を求める。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 398 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>可否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>授業態度、小テスト、期末テストによって総合的に判断する。</p>	評 定	評価基準	可否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	可否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果の状況をもとに再試験やレポートを課す</p>															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p>本講義は、衛生行政や学校や職場、地域における歯科衛生指導といった関連科目を履修する上での基礎的な知識を学ぶ重要専門科目である。「公衆歯科衛生学」と深く関連する科目である。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 歯・口腔の健康と予防に関わる人間と社会の仕組み 1 「保健生態学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書	<p>鈴木庄亮監修小山洋・辻一郎編集「シンプル衛生公衆衛生学 2019」南江堂 厚生労働統計協会「国民衛生の動向 2022 / 2023」 関連する文献（書籍やホームページなど）適宜紹介する。</p>															

授 業 科 目	歯科衛生士概論（講義） 必修 30 時間（前期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育 方針と概要	<p>歯科衛生を実践して人びとの健康づくりを支援する者となるために、保健医療人としての基本的態度について理解し、多様な科目において知識・技術を習得する態度および論理的思考法の基礎を習得する。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯科衛生士の定義を述べることができる 2. 歯科衛生過程について説明することができる 3. 歯科衛生士による健康づくり支援は、患者第一に実践される理由を説明することができる 4. 業務記録の意義を説明することができる 5. 歯科衛生の実践は倫理的でなければならない理由を述べるすることができる 6. コミュニケーション能力の必要性を説明することができる 7. 保健・医療・福祉専門職それぞれの業務を概説することができる 8. 他職種との連携を述べつつ、チーム医療について概説することができる 9. 歯科衛生士業務と医療安全とを関連付けて説明することができる 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 歯科衛生学とは 第 2 回 " 第 3 回 歯科衛生士の歴史 第 4 回 歯科衛生活動のための倫理 第 5 回 医療保険従事者の目標 第 6 回 健康への対応 第 7 回 歯科医療を支えるもの 第 8 回 歯科医療の分野 第 9 回 診療室での心構え・歯科衛生士の役割り 第 10 回 歯科衛生過程の流れ 第 11 回 " 第 12 回 歯科衛生士法と衛生業務 第 13 回 観察と記録・業務記録 第 14 回 歯科衛生と医療倫理（倫理網要含む） 第 15 回 歯科衛生士の活動と組織 まとめ</p>		

履修上の注意	出席は毎時間取るので無断で欠席しない事 解らないところは積極的に質問する事															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 400 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 1401 784">定期試験では到達目標のリストに挙げた事柄の意味を理解し、問題に応用してとく事が出来る事をみる。定期試験の結果で成績評価を行う ペナルティーは定期試験より減点する 態度・言動・準備品不足なども評価の対象となる</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果の状況をもとに再試験やレポートを課す															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	歯科衛生士概論では、健康づくりをサポートする歯科衛生業務を有効に展開するために必要な態度など、専門職や技能の全体像を学ぶ基礎となるものである。															
教 科 書	歯科衛生学シリーズ「歯科衛生学総論」 医歯薬出版															
参 考 書																

授 業 科 目	歯科臨床概論（講義） 必修 20 時間（前期）	担当教員	薄井 稔 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	歯科臨床の概要を理解し、各論理解への橋渡しの役割を果たす。 可能な限り、臨床的な内容で構成する。		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯科臨床の流れやその特異性を理解する。 2. 歯科保存学、歯周病学等の各臨床的概要を理解する。 3. 医療行為における感染症対策、医療事故防止について理解する 		
授 業 計 画	第 1 回 歯科診療と歯科診療所 第 2 回 歯科診療の流れと診査・検査・前処置 第 3 回 小児歯科 第 4 回 歯科矯正 第 5 回 口腔外科 第 6 回 歯科保存 第 7 回 歯周治療 第 8 回 歯科補綴 第 9 回 障害者歯科・高齢者歯科・摂食嚥下障害 第 10 回 周術期・全身疾患への対応		

履修上の注意	講義は、歯科臨床のあらゆる項目に及ぶ為、できるだけ出席しその時間の中で理解する事。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 633 1406 707">授業態度及び定期試験の結果で、達成目標のリストに挙げた内容を理解し問題を解く事が出来るかをみる。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験、レポートを課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	歯科臨床各論の全てに関連し、各論を理解する基礎となるものである。															
教 科 書	歯科衛生士のための歯科臨床概論 第2版 医歯薬出版															
参 考 書																

授 業 科 目	歯科放射線学（講義） 必修 28 時間（後期）	担当教員	渥美 龍雅 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>本講義は、将来歯科衛生士として患者や術者の防護管理も配慮した適切な撮影補助や機器の管理もできるようになるために、放射線の発生、生物学的影響、防護および管理を中心とした放射線の基礎から正常画像解剖、病的像およびCT、磁気共鳴画像検査（MRI）等の各種画像検査法についても修得する。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. エックス線の原理および特徴を説明できる 2. エックス線検査の役割およびリスクを説明できる 3. 口内法、口外法の原理および特徴を説明できる 4. CT、MRI、超音波、核医学検査の特徴を説明できる 5. 放射線防護、影響、法的規制および放射線治療を説明できる 6. 歯周組織、顎骨病変の正常および病的像を説明できる 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 放射線の発生と歯科用エックス線装置 第 2 回 口内法エックス線検査、現像・デジタル処理 第 3 回 口内法（二等分法、平行法）実習① 第 4 回 口内法（二等分法、平行法）実習② 第 5 回 口外法、パノラマエックス線検査 第 6 回 パノラマエックス線撮影実習，口内法読影 第 7 回 放射線の生物学的作用と放射線治療 第 8 回 放射線の防護、影響および法的規制 第 9 回 中間テスト 第 10 回 全身用CT、歯科用CBCT 第 11 回 MRI 検査、超音波、核医学検査 第 12 回 歯及び歯周組織構造の正常画像と病的画像 第 13 回 顎骨嚢胞、腫瘍等の画像診断 第 14 回 まとめ、実践問題演習</p>		

履修上の注意	予習、復習を必ず行うこと。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 400 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 633 970 745">講義への参加度、平常点、参加意欲 10% 中間試験 10% まとめ（学年末）試験 80%</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	達成評価に満たないものには、再試験を課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	授業の一環として口内法（二等分法、平行法）、口外法（パノラマエックス線写真）の実習を行う。															
教科書	歯科衛生士講座「歯科放射線学」 永末書店															
参考書	「Q&A」で学ぶ歯科放射学・SBOS 講義 金田隆 編集 学研書院															

授 業 科 目	保存修復学（講義） 必修 20 時間（後期）	担当教員	牧 浩 壽 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>保存修復学は日常診療の中でたずさわる機会の多い、カリエス除去形成、充填、審美回復を行うという、自然治癒の望めない硬組織疾患の修復を目的とする学問である。</p> <p>授業は教本をしっかりとマスターすることを基本とし、また国家試験の出題もふまえて進めていく。限られた時間の中で、現在のトピックについても触れていきたい。</p>		
達成目標	<p>歯の硬組織疾患の種類、診療のステップ、歯の切削法、窩洞形成法の理解とコンポジットレジン修復、インレー修復、ベニア修復、セメント修復等の意義と修復法、そして各修復時の診療補助業務、また歯のホワイトニングについて理解、習得する。</p>		
授 業 計 画	<p>第 1 回 保存修復の概要 歯の硬組織疾患の種類と病態、う蝕の病態、診療のステップと歯科衛生士の役割について学ぶ。</p> <p>第 2 回 保存修復の処置方法について 歯の切削と窩洞形態、形成法、歯髄保護、保存修復法の種類について学ぶ。</p> <p>第 3 回 コンポジットレジン修復① 直接法修復であるコンポジットレジン修復について、論と材料器材、歯質接着の基礎について学ぶ。</p> <p>第 4 回 コンポジットレジン修復② コンポジットレジン修復について、特徴と手順、診療補助業務について学ぶ。</p> <p>第 5 回 セメント修復、アマルガム修復 ガラスイオノマーセメントを中心に、各種歯科用セメントによる修復法と診療補助について、またアマルガム修復について学ぶ。</p> <p>第 6 回 インレー修復① 間接法修復であるインレー修復について、分類と適応症を知りメタルインレー修復についてその特徴と手順、使用される歯科用鋳造用合金の種類について学ぶ。</p> <p>第 7 回 インレー修復②、合着材および接着剤 メタルインレー修復の診療補助とメタルインレー修復の技工作業の基礎知識について学ぶ。 合着と接着の意味、それぞれに用いられるセメントの特性と取り扱い手順について学ぶ。</p> <p>第 8 回 インレー修復③ コンポジットレジンインレー修復、セラミックインレー修復についてそれぞれの特徴と適応症等について学ぶ。 また診療補助について学ぶ。</p> <p>第 9 回 インレー修復④、ベニア修復 コンポジットレジンインレー修復、セラミックインレー修復の診療補助について学ぶ。 ベニア修復についてその意味と、適応症、禁忌症、種類と手順について学ぶ。</p> <p>第 10 回 歯のホワイトニングとこれまでのまとめ 歯のホワイトニングについて学ぶ またこれまでの学習内容を振り返り、総復習を行う。</p>		

履修上の注意	質問時間を設けるので、不明点については遠慮なく質問すること。 また各回、それぞれ課題を出すので必ず出席すること。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 400 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 633 1310 707">授業内容から作成する期末試験（100 点満点）の結果において行う。 そのため出席状況、授業態度も評価対象とする。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	課題に対するレポートの提出。 期末試験の結果をふまえた再試験を行う。															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	保存修復学は解剖学、理工学などの基礎学問の上に成り立つ大変重要な 歯科臨床学問であり、その習得は歯科医療に従事する上で必要不可欠である。 正しい理解は歯髄の保護と予防につながるものである。															
教 科 書	歯科衛生学シリーズ 「保存修復学・歯内療法学」 医歯薬出版 新・歯科衛生士教育マニュアル 「保存修復」 クインテッセンス出版															
参 考 書																

授 業 科 目	歯内療法学（講義） 必修 24 時間（後期）	担当教員	中澤 弘貴 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>歯内療法は歯科保存学の一分野であるが、歯科における基礎的な治療として、その意義や術式を理解することは、歯科衛生士として大切である。歯内療法は、根管治療が主ではなく、歯髄を助けることが、より大切であることを理解させたい。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯内療法の概要を理解させる。 2. 歯髄の保存療法を理解させる。 3. 歯髄の除去療法及び根管治療を理解させる。 4. 外科的歯内療法を理解させる。 5. 歯内療法に使う、薬剤、器材を理解させる。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 歯内療法の概要（臨床ケースプレゼンテーションを行う） 第 2 回 " (") 第 3 回 " (歯内療法とは、歯痛とは、他) 第 4 回 " (根尖性歯周炎、歯髄炎) 第 5 回 歯科衛生士と歯内療法 第 6 回 歯髄の保存療法 第 7 回 歯髄の除去療法 第 8 回 根管治療 第 9 回 根管充填 第 10 回 外科的歯内療法 第 11 回 歯内療法における偶発症 第 12 回 歯内療法における薬剤、器材</p>		

履修上の注意	授業中でも分からないことは積極的に質問すること。 授業中に、寝たり、授業以外のことを行わないこと。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="456 636 1259 707">達成目標に挙げたことがらを、定期試験で、その理解度をみる。 定期試験の結果で成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験や、レポート提出を行う。															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p data-bbox="456 920 1406 992">歯科保存学の一分野が歯内療法であるが、基礎的な治療の一つで、大変重要である。</p> <p data-bbox="456 999 1406 1070">特に、歯科医師との連携した作業が多いことから、歯内療法の意義を教えることは、大切である。</p> <p data-bbox="456 1077 1342 1113">また、これらに使用する、器材、薬剤を理解することも大切である。</p>															
教 科 書	歯科衛生学シリーズ 「保存修復学・歯内療法学」 医歯薬出版															
参 考 書																

授 業 科 目	歯周治療学（講義） 必修 24 時間（後期）	担当教員	高根 正敏 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育 方針と概要	<p>歯周治療学の教育目標は、歯周病がどのような病気であるかを理解し、その治療法と予防法を理解することである。</p> <p>歯周治療は歯科衛生士が積極的に参加し活躍する分野であり、きわめて重要である。まず、歯周組織の解剖、歯周病に関連する病理学、微生物学の知識を整理して理解を深める。次に、これらの知識をもとに、歯周病の治療法の基本を学び、実習も行って理解を深める。</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 正常な歯周組織と歯周病に罹患した歯周組織（歯肉炎、歯周炎）の特徴および歯周病の進行のメカニズムを理解する。 2. 歯周病の原因を理解し、基本的な検査が行える。 3. 歯周治療の基本的考え、原因除去が大切であることを理解する。 4. 歯周病の基本治療、歯周外科治療、咬合治療を理解する。 5. 歯周病の全身への影響、メンテナンスの重要性を理解する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 オリエンテーション、歯周病とは</p> <p>第 2 回 歯周組織、歯周病の病理</p> <p>第 3 回 歯周病の原因、進み方</p> <p>第 4 回 歯周治療の進め方</p> <p>第 5 回 歯周病の検査</p> <p>第 6 回 歯周基本治療</p> <p>第 7 回 歯周外科</p> <p>第 8 回 口腔機能回復治療、メンテナンス・SPT</p> <p>第 9 回 歯科衛生士の役割・検査</p> <p>第 10 回 歯科衛生士の役割・患者教育</p> <p>第 11 回 歯科衛生士の役割・SRP</p> <p>第 12 回 歯科衛生士の役割・外科</p>		

履修上の注意	<p>歯周治療は歯科衛生士にとってきわめて重要であり、まず歯周病がどのような病気であるかをしっかりと理解し、それをもとにして臨床的な知識と技術を身につけることが大切である。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>可否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験を行い、達成目標で上げた事柄、基本的事項を理解しているかどうかを評価する。さらに講義と実習における態度、歯科衛生士になるための取り組み方、熱意などを日常点として評価し、総合的に評価・判定する。</p>	評 定	評価基準	可否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	可否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>再試験、レポート報告により、目標水準に達するよう努力してもらう。さらに必要に応じて補講を行う。</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>歯周病を理解するには、解剖学、病理学、微生物学など基礎歯学の分野の知識が必要であり、関連が深い。</p> <p>歯周治療の分野、とくに口腔清掃指導、スケーリング、ルートプレーニングは、きわめて重要であり、歯科予防処置、口腔衛生学と密接な関係にあり、これらと協力して 講義、実習を行う体制をとり充実を図る。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ「歯周病学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書	<p>歯科衛生士のための新歯周病学（加藤熙著、医歯薬出版社、2018）</p>															

授 業 科 目	歯科補綴学（講義） 必修 24 時間（後期）	担当教員	
授業目標・教育方針と概要	<p>歯科補綴学の目標は、口腔やそのまわりの組織及び全身を考えながら、一本の歯の一部分の欠損から全ての歯の欠損そして顎顔面や軟組織の欠損まで、歯の喪失及びそれに伴うまわりの組織の変化で起きてくる口腔あるいは顔面の変形の回復、及び口腔のいろいろな機能（咬む・飲み込む・発音する）の低下を、人工物を設けることにより回復させ、かつ歯や顎顔面・軟組織の欠損・喪失に続いて生じる弊害を予防することにある。そして、これにより健康寿命の延伸と QOL の維持・向上を図ることができる。</p> <p>以上の事を理解してもらい、かつ臨床における実際の治療法を習得してもらう。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 補綴歯科治療の目的を概説できる。 2. 歯の欠損に伴う生理的変化を説明できる。 3. 補綴装置の種類とその特徴を概説できる。 4. 補綴歯科治療における歯科衛生士の役割を概説できる。 		
授業計画	<p>第 1 回：〔Ⅰ編〕 補綴歯科治療の基礎 1 章：歯科補綴の概要</p> <p>第 2 回： 2 章：補綴歯科治療の基礎知識（その 1）</p> <p>第 3 回： 2 章： 〃（その 2）</p> <p>第 4 回：〔Ⅱ編〕 補綴歯科治療の実際と歯科衛生士の役割 1 章：補綴歯科治療における検査</p> <p>第 5 回： 2 章：クラウン・ブリッジ治療（その 1）</p> <p>第 6 回： 2 章： 〃（その 2）</p> <p>第 7 回： 2 章： 〃（その 3）</p> <p>第 8 回： 3 章：有床義歯治療（その 1）</p> <p>第 9 回： 3 章： 〃（その 2）</p> <p>第 10 回： 3 章： 〃（その 3）</p> <p>第 11 回： 4 章：インプラント治療</p> <p>第 12 回： 5 章：特殊な口腔内装置を用いる治療 6 章：補綴歯科治療における器材の管理</p>		

履修上の注意	授業内容にそった補綴装置を授業中持って来るので、それを見て、さわって、なるべく授業中に理解するように。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="596 400 1281 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 633 1406 707">達成目標に挙げた内容を理解しているか、定期試験にてチェックし成績を評価する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果により、再試験を行う。															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p data-bbox="459 916 1406 1032">歯科補綴学は臨床科目であり、「口腔形態の変化や諸機能の減弱を本来の状態に復帰させる」という、歯科治療全体の流れのなかで、ほぼ最終部分を担う学問である。</p> <p data-bbox="459 1039 1406 1113">また『歯科診療補助論 第2版』、『歯科機器』や『歯科材料』などの関連教本の内容ともリンクしている。</p>															
教科書	歯科衛生学シリーズ 「歯科補綴学」 医歯薬出版															
参考書																

授 業 科 目	口腔外科学（講義） 必修 28 時間（後期）	担当教員	松尾 朗 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>歯科の2大疾患むし歯と歯周病ですが、日常の歯科診療ではそれ以外にも様々な疾患を取り扱っており、その多くは口腔外科と関連します。また、今回のコロナ禍で、口腔領域が如何に感染のリスクが高く、感染防御対策が重要であるか再認識されました。口腔外科の講義では、歯と口に関連する様々な疾患について、その原因、主要症状、治療法、さらに、感染防御や麻酔に関する知識および歯科衛生士の役割を習得します。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口腔外科で取り扱う様々な疾患の原因、主要症状、治療法について理解する。 2. 歯科における感染防御対策、特に滅菌消毒の必要性、その方法について理解する。 3. 歯科麻酔について理解する。 4. 上記について、歯科衛生士としての診療介助の方法を習得する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 口腔外科総論、顎顔面領域の診察と診断 第 2 回 炎症性疾患 第 3 回 全身疾患を有する患者の歯科治療 第 4 回 感染防御法 第 5 回 バイタルサイン、局所麻酔 第 6 回 全身麻酔、精神鎮静法 第 7 回 神経疾患・顔面領域の慢性疼痛 第 8 回 粘膜疾患、唾液腺疾患 第 9 回 外傷 第 10 回 救命救急処置 第 11 回 抜歯を含む口腔外科小手術とスタンダードプリコーション 第 12 回 インプラント手術と清潔操作 第 13 回 先天性疾患、発育異常、顎関節疾患 第 14 回 腫瘍・嚢胞・類似疾患</p>		

履修上の注意	<p>教科書に準じて講義を進めますが勧めますが、実際の講義はスライドを中心に、多くの症例を供覧し実際の診療に役立つ知識を解説しますのでよく聞いて下さい。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験の結果で成績評価を行います。 定期試験問題は、口腔外科の広い範囲についての理解力を見るために、国家試験形式で出題します。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験で合格点に達しない者には、再試験を課します。</p>															
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	<p>口腔外科は臨床科目であり、その理解のためには、解剖学、病理学、生理学、薬理学、微生物学など、幅広い基礎科目の知識が必要とされます。 その一方で、口腔外科手術で行われる清潔操作や感染症を持った患者さんへの感染防御対策は、ポストコロナ時代の新しい歯科診療の基本であり、他の臨床科目でも役立つと期待されます。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 「口腔外科学・歯科麻酔学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	小児歯科学（講義） 必修 24 時間（後期）	担当教員	権 暁成 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>小児歯科学の目的は、胎生期から成長発達して成人にいたる間の小児の口腔領域の正常な発育をはかり、その健全な発育を傷害する異常や疾病について、その予防と治療を習得する。それらの知識を使用して、口腔の健康管理を行い、健全な口腔機能を育成するための理論や方法を習得させる事である。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児の発育過程（心身・頭蓋顔面顎・歯列咬合歯を含む） 2. 小児の歯科疾患の特徴を説明できる 3. 小児歯科診療体系を説明できる 4. 小児の口腔健康管理の実施が出来る 5. 小児患者（障害児を含む）の診療補助に必要な知識を理解し診療補助の実施が出来る 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 全体の授業内容（シラバス）の説明と口腔の健康 口腔の健康管理</p> <p>第 2 回 心身の発育</p> <p>第 3 回 頭蓋・顔面・顎の発育</p> <p>第 4 回 歯列・咬合の発育と異常</p> <p>第 5 回 歯の発育と異常</p> <p>第 6 回 乳歯・幼若永久歯の特徴</p> <p>第 7 回 小児の口腔疾患（う蝕・軟組織の異常も含む） 小児期の特徴と歯科的問題</p> <p>第 8 回 小児の口腔保健管理計画（診療計画）</p> <p>第 9 回 小児への対応法</p> <p>第 10 回 小児の診療補助における原則</p> <p>第 11 回 小児の診査・修復・歯内療法における診療補助</p> <p>第 12 回 小児の外科・咬合誘導・機能障害における診療補助 心身障害児の歯科治療</p>		

履修上の注意	<p>出欠は毎時間とるので欠席しないこと。 どの程度理解しているかを視るため時々質問をするが成績には関係しない。 解らないことは積極的に質問すること。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験では達成目標のリストに挙げたことからの意味を理解し、問題に応用して解くことができることを見る。定期試験の結果で成績評価を行う。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果の状況をもとに、再試験やレポートを課す。</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>小児の診療補助は講義だけでは理解し難いのでチェアーサイドで演習を行う。</p>															
教科書	<p>歯科衛生学シリーズ「小児歯科学」 医歯薬出版</p>															
参考書																

授 業 科 目	歯科矯正学（講義） 必修 22 時間（後期）	担当教員	若松 孝典 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>歯並びやかみ合わせの不正によって生じる障害を認識し、矯正治療の重要性を総合的に修得する。 それに必要な生物学的、物理学的（力学）な基礎知識を理解する。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯、歯周組織、顎とそれらを含む顎の正常な発育を理解する。 2. 顎顔面の不正な発育、局所的原因によって引き起こされる不正咬合を理解する。 3. 矯正治療を行うための、診断、症例分析、歯牙移動のメカニズムを理解する。 4. 矯正装置について十分に理解する。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 矯正歯科治療の概要 第 2 回 成長発育 頭部・顔面の成長発育 第 3 回 成長発育 頭部・顔面の成長発育 第 4 回 正常咬合 第 5 回 不正咬合 第 6 回 原因論 第 7 回 矯正歯科診断 第 8 回 矯正歯科治療と力 第 9 回 矯正歯科治療と力 第 10 回 矯正装置 第 11 回 矯正装置 保定・矯正治療における歯科衛生士の役割</p>		

履修上の注意	<p>欠席は避けるようにし、欠席した時には積極的に質問をし、その時間の講義内容を良く修得する事。場合によってはレポートの提出をする。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験による結果で成績評価をする。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>再試験やレポート提出を課す。</p>															
<ul style="list-style-type: none"> ・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け 	<p>歯科医療の中で各科の授業と密接な関係があるが、特に小児歯科とのかかわりが深い。 また、矯正治療は新しい咬合を構築するので、歯科全体の知識の把握が必要である。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 「歯科矯正学」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	歯科予防処置論（講義） 必修 40 時間（前期・後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	歯や口腔の疾患を予防し健康な口腔環境を獲得するために、歯科衛生士が学ぶべき必要な基礎知識を習得することを目的とする。		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予防的歯石除去の意義を述べることができる。 2. 歯周組織の構造について述べるができる。 3. 歯石除去の方法を挙げるができる。 4. 各種スケーラーの特徴を述べるができる。 5. スケーラーのシャープニングの意義を述べるができる。 6. 砥石の種類を挙げるができる。 7. 歯面研磨の目的を述べるができる。 8. PMTC の意義を述べるができる。 9. 偶発事故の予防と対策を挙げるができる。 10. 手指消毒の必要性と消毒法が説明できる。 		
授業計画	<p>第 1 回 歯科予防処置とは</p> <p>第 2 回 歯周組織について</p> <p>第 3 回 歯周病の基礎知識</p> <p>第 4 回 歯周組織の肉眼的変化について (ポケットの形成、アタッチメントレベル)</p> <p>第 5 回 スケーラーの把持、操作、運動方法</p> <p>第 6 回 ”</p> <p>第 7 回 シックルタイプスケーラーによる基礎実習</p> <p>第 8 回 歯牙観察</p> <p>第 9 回 実習室の使用法</p> <p>第 10 回 実習事前オリエンテーション</p> <p>第 11 回 保険証について</p> <p>第 12 回 口腔内診査について</p> <p>第 13 回 プロービングについて</p> <p>第 14 回 歯面研磨について</p> <p>第 15 回 キュレットスケーラーについて</p> <p>第 16 回 シャープニングについて</p> <p>第 17 回 超音波スケーラーについて</p> <p>第 18 回 エアスケーラーについて</p> <p>第 19 回 エアフローについて</p> <p>第 20 回 PMTC について</p>		

履修上の注意	講義・実習を同時に行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>筆記試験 (達成目標の意味を理解し、解くことができることをみる) 授業態度も加味する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	筆記試験の結果の状況をもとに、再試験を課す。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	「歯科予防処置」と「歯科保健指導」とは密接な関係にあり、生活の質の向上、維持していくことにおいて歯科予防処置の果たす役割は大きい。これらの科目との理解を深め、歯科衛生業務の基礎知識の理解を図る。															
教科書	歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版															
参考書																

授 業 科 目	歯科予防処置論 I 実習 必修 120時間(前期・後期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育 方針と概要	歯科予防処置の基礎知識を学んだうえで、安全に患者さんに配慮することを念頭に、歯や口腔の疾患の予防のための技術、態度を身につける。		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各種スケーラーの操作を理解する。 2. 術部に応じたポジショニングができる。 3. マニキン実習でシックルタイプスケーラーを理解して操作できる。 4. マニキン実習でキュレットタイプスケーラーを理解して操作できる。 5. シャーピングの方法を理解して操作できる。 6. 歯面研磨の方法を理解して操作できる。 7. PMTCの方法を理解して操作できる。 8. 口腔観察を行い正確に記録、実施できる。 9. 実施した業務の記録が記載できる。 10. 診療に用いる器具の滅菌・消毒を行うことができる。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 スケーラーの把持法、固定</p> <p>第 2 回 腕運動 1</p> <p>第 3 回 腕運動 2</p> <p>第 4 回 マニキンの取り扱い</p> <p>第 5 回 ストローク確認</p> <p>第 6 回 実習室の使用法についてオリエンテーション</p> <p>第 7 回 //</p> <p>第 8 回 シックルタイプスケーリング《マニキン》 1, 2, 3, 4 群</p> <p>第 9 回 //</p> <p>第 10 回 シックルタイプスケーリング《マニキン》 5, 6, 7, 8 群</p> <p>第 11 回 //</p> <p>第 12 回 シックルタイプスケーリング《マニキン》 9, 10, 11, 12 群</p> <p>第 13 回 //</p> <p>第 14 回 シックルタイプスケーリング《マニキン》(復習 1)</p> <p>第 15 回 //</p> <p>第 16 回 シックルタイプスケーリング《マニキン》(復習 2)</p> <p>第 17 回 //</p> <p>第 18 回 口腔内診査、プロービング《マニキン》</p> <p>第 19 回 //</p> <p>第 20 回 口腔内診査《相互》</p> <p>第 21 回 //</p> <p>第 22 回 プロービング I 《相互》</p> <p>第 23 回 //</p>		

第24回	歯面研磨《相互》
第25回	〃
第26回	シックルタイプスケーリング《相互》3,4群
第27回	〃
第28回	シックルタイプスケーリング《相互》1,2群
第29回	〃
第30回	シックルタイプスケーリング《相互》5,6群
第31回	〃
第32回	シックルタイプスケーリング《相互》7,8群
第33回	〃
第34回	シックルタイプスケーリング《相互》9,10群
第35回	〃
第36回	シックルタイプスケーリング《相互》11,12群
第37回	〃
第38回	キュレットタイプスケーリング《マニキン》1,2,3,4群
第39回	〃
第40回	キュレットタイプスケーリング《マニキン》5,6,7,8群
第41回	〃
第42回	キュレットタイプスケーリング《マニキン》9,10,11,12群
第43回	〃
第44回	キュレットタイプスケーリング《マニキン》(復習)
第45回	〃
第46回	プロービングⅡ《相互》
第47回	〃
第48回	キュレットタイプスケーリング《相互》1,2,3,4群
第49回	〃
第50回	キュレットタイプスケーリング《相互》5,6,7,8群
第51回	〃
第52回	キュレットタイプスケーリング《相互》9,10,11,12群
第53回	〃
第54回	シックルタイプスケーラー シャープニング
第55回	キュレットタイプスケーラー シャープニング
第56回	超音波スケーリング《マニキン》
第57回	エアースケーラー《マニキン》
第58回	超音波スケーリング《相互》
第59回	エアースケーラー《相互》
第60回	エアフロー《相互》

履修上の注意	講義・実習を同時に行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>実技試験 シックルタイプスケーラー操作のマニキン実技</p> <p>実習の取り組みも評価する。 準備物不足は実技試験より減点する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>実技試験で合格していなかった学生は合格するまで再テストを受ける。 また、場合によっては実技試験で合格していても再テストを受けることもある。</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>歯科予防処置は歯科衛生士が行う業務独占であり、内容は歯石や歯の表面の汚れを専用の機械や器具を使用して取り除くテクニックを習得する。基礎知識を学び、理解した上で手技の技術習得を図る。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	う蝕予防処置論（講義） 必修 20 時間（前期・後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	う蝕予防を実施する為に必要な知識を理解し、習得する。		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. う蝕の性質と特徴を理解し、う蝕予防処置法を説明出来る。 2. う蝕活動性試験の評価が出来る。 3. フッ化物の意義、その応用法と術式を理解出来る。 4. フッ化ジアンミン銀の術式と汚染時の処置方法を理解出来る。 5. 小窩裂溝填塞法の種類と術式を理解出来る。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 う蝕予防処置法</p> <p>第 2 回 う蝕の発生と細菌</p> <p>第 3 回 う蝕活動性試験</p> <p>第 4 回 フッ化物応用の知識</p> <p>第 5 回 フッ化物の応用法</p> <p>第 6 回 フッ化物洗口法</p> <p>第 7 回 フッ化物歯面塗布</p> <p>第 8 回 フッ化物の毒性</p> <p>第 9 回 フッ化ジアンミン銀</p> <p>第 10 回 小窩裂溝填塞</p>		

履修上の注意	<p>無断欠席はせず、分らないことがある場合は質問すること。 講義、実習を同時に行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。 手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験を実施する。 授業態度も加味する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験を実施する。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>う蝕予防処置は、う蝕を予防し、歯・口腔の健康を維持・増進させるための基礎知識を学ぶ重要な科目である。</p>															
教科書	歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版															
参 考 書	<p>最新歯科衛生士教本「歯科予防処置論・歯科保健指導論」第2版 医歯薬出版 歯科衛生士のための齲蝕予防処置法 医歯薬出版 歯科衛生士教育マニュアル・実習書 現代齲蝕予防処置法 クインテッセンス出版 う蝕予防の実際 フッ化物局所応用実施マニュアル 社会保険研究所</p>															

授 業 科 目	う蝕予防処置論実習(実習) 必修 30 時間(前期・後期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	う蝕予防を実施する為に必要な技術を身につける。		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. う蝕活動性試験の手順を理解し、指導出来る。 2. フッ化物の中毒量の算出が出来き、安全性が説明出来る。 3. フッ化物の応用法が実施出来る。 4. フッ化ジアンミン銀の着色時の処置法を実施出来る。 5. フッ化ジアンミン銀の術式を実施出来る。 6. 小窩裂溝填塞の術式を実施できる。 7. 事後の注意を説明出来る。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 う蝕活動性試験</p> <p>第 2 回 "</p> <p>第 3 回 フッ化物洗口法、中毒量の計算</p> <p>第 4 回 "</p> <p>第 5 回 イオン導入法・相互</p> <p>第 6 回 "</p> <p>第 7 回 フッ化ジアンミン銀塗布・マネキン、手指及び布への着脱色</p> <p>第 8 回 "</p> <p>第 9 回 フッ化ジアンミン銀塗布・相互</p> <p>第 10 回 "</p> <p>第 11 回 抜去歯牙への小窩裂溝填塞</p> <p>第 12 回 ラバーダム防湿・小窩裂溝填塞・相互</p> <p>第 13 回 "</p> <p>第 14 回 復習</p> <p>第 15 回 "</p>		

履修上の注意	講義、実習を同時に行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 398 1278 613"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>実技試験 実習の際の忘れ物も評価に含まれる</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	実技再試験、レポート提出															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	う蝕予防処置は、う蝕を予防し、歯・口腔の健康を維持・増進させるための基礎知識を理解した上で、手技の技術習得を図る。															
教科書	歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」第2版 医歯薬出版															
参考書	最新歯科衛生士教本「歯科予防処置論・歯科保健指導論」第2版 医歯薬出版 歯科衛生士のための齲蝕予防処置法 医歯薬出版 歯科衛生士教育マニュアル・実習書 現代齲蝕予防処置法 クインテッセンス出版 う蝕予防の実際 フッ化物局所応用実施マニュアル 社会保険研究所															

授 業 科 目	歯科保健指導論 I (講義) 必修 60 時間 (前期・後期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	歯科保健指導および健康教育を行うために必要な基礎知識、歯科衛生士としての役割を修得する		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯科保健指導の意義を理解する事ができる 2. 歯ブラシの構造と選択条件を述べる事ができる 3. ブラッシング方法の特徴を理解する 4. その他の清掃用具の種類と特徴を理解する 5. 歯科衛生過程を理解する 6. 各ライフステージにおける保健行動を述べる事ができる 7. 各ライフステージに適した保健指導の内容を挙げることができる 		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 第 1 回 歯口清掃とは、歯ブラシの構成① 第 2 回 歯ブラシの構成②・管理・選び方 第 3 回 電動歯ブラシ、ジェット水流洗口器 第 4 回 その他の清掃用具① 第 5 回 その他の清掃用具② 第 6 回 ブラッシング法 第 7 回 歯垢染出し剤 第 8 回 ブラッシングによる害 第 9 回 口腔清掃指数① 第 10 回 口腔清掃指数② 第 11 回 歯磨剤、洗口剤 第 12 回 ライフステージ別に応じた口腔清掃 第 13 回 保健指導の定義 第 14 回 歯科保健指導論の内容・健康の概念 第 15 回 行動変容の要素とステップー① 第 16 回 食生活指導の基礎 第 17 回 歯科衛生過程についてー① 第 18 回 患者からの情報収集 第 19 回 食生活指導の進め方 第 20 回 喫煙者に対する指導 第 21 回 妊産婦期・新生児期歯科保健指導 (症例検討を含む) 第 22 回 新生児期・乳児期の歯科保健指導まとめ (症例検討を含む) 第 23 回 幼児期の歯科保健指導 第 24 回 学齢期の歯科保健指導まとめ 第 25 回 青年期・成人期歯科保健指導 第 26 回 老年期の歯科保健指導 第 27 回 要介護高齢者・障害者の歯科保健指導 第 28 回 歯科衛生過程についてー② 		

	<p>第 29 回 歯科衛生過程について② (症例検討を含む)</p> <p>第 30 回 周術期・災害支援について / まとめ (症例検討を含む)</p>															
履修上の注意	<p>出席は毎時間とるので無断で欠席しない事 解らないところは積極的に質問する事</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ~ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ~ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ~ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験では到達目標のリストに挙げた事柄の意味を理解し、問題に応用してとく事が出来る事をみる。定期試験の結果で成績評価を行う授業態度も加味する</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ~ 100 点	合 格	良	70 ~ 84 点	合 格	可	60 ~ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ~ 100 点	合 格														
良	70 ~ 84 点	合 格														
可	60 ~ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不合格														
水準に達しない学生に対する対応	<p>定期試験の結果の状況をもとに再試験やレポートを課す</p>															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>歯科保健指導では、個人あるいは集団を対象として口腔の健康をより良い状態を保つため、正しい知識や方法を理解することが重要となる。</p>															
教科書	<p>歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版 オーラルヘルスケア事典 学建書院</p>															
参考書																

授 業 科 目	歯科保健指導論 I 実習 必修 30 時間 (前期・後期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育 方針と概要	<p>歯科保健指導および健康教育を行うために必要な基礎知識、歯科衛生士としての役割を理解し、知識・技術・態度を修得する</p>		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歯科保健指導の意義を理解する事ができる 2. 歯ブラシの構造と選択条件を述べる事ができる 3. ブラッシング方法の特徴を述べる事ができる 4. その他の清掃用具の種類と特徴を述べる事ができる 5. 各ライフステージにおける保健行動を述べる事ができる 6. 各ライフステージに適した保健指導の内容を説明できる 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 口腔内観察相互実習 第 2 回 " 第 3 回 プラーク観察・ブラッシングマニキン 第 4 回 " 第 5 回 ブラッシング相互実習 第 6 回 " 第 7 回 口腔内写真撮影 第 8 回 " 第 9 回 症例検討計画 (診療補助とタイアップ) 第 10 回 " 第 11 回 症例検討発表 (診療補助とタイアップ) 第 12 回 寝かせ磨き 第 13 回 " 第 14 回 高齢者実習 (対応、口腔機能低下症検査等含む) 第 15 回 "</p>		

履修上の注意	基礎知識を学びながら手技を体得する															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 405 1278 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="459 636 1203 707">作成提出物の評価（歯ブラシ媒体） 準備品不足なども評価の対象となる。授業態度も加味する。</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果の状況をもとにレポートや再試験を課す															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p data-bbox="459 981 1401 1048">歯科保健指導で口腔の健康をより良い状態を保つため基礎知識を理解した上で、手技の技術習得を図る。</p>															
教 科 書	<p data-bbox="459 1223 1362 1290">歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版 オーラルヘルスケア事典 学建書院</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	歯科診療補助論Ⅰ（講義） 必修 36時間（前期・後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	円滑な歯科診療補助を行うために必要な基礎的知識を修得する。		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 標準予防策について理解する。 2. 共同動作を理解する。 3. 歯科材料について基本的な性質と使用法について理解する。 4. 歯科材料の保管、補給、整理、後始末等の重要性を理解する。 5. 生体への医療行為に使用されることを認識し、安全で清潔な状態で取り扱う方法を理解する。 6. 診療の流れをスムーズにし歯科医師の負担を軽減するとともに、患者の緊張をやわらげ、材料等の質問に的確に応えられるようにする。 		
授 業 計 画	<ul style="list-style-type: none"> 第1回 診療補助総論 第2回 医療安全と感染予防 第3回 感染予防対策（医療廃棄物、曝露事故） 第4回 消毒・滅菌 第5回 ヒヤリハット 第6回 共同動作の基本 第7回 合着材、接着材 第8回 // 第9回 印象材（アルジネート） 第10回 歯科用石膏 第11回 バキュームテクニック 第12回 印象材（寒天印象材、合成ゴム質印象材、その他の印象材） 第13回 ラバーダム防湿 第14回 // 第15回 共同動作Ⅰ 第16回 共同動作Ⅱ 第17回 共同動作Ⅲ 第18回 ワックスパターン（歯科技工士科） 		

履修上の注意	<p>講義・実習を同時に行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。</p> <p>手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。授業態度も評価の対象となる。</p>															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="593 400 1278 616"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>可否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合 格</td> </tr> </tbody> </table> <p>定期試験を実施する。授業態度も加味する。</p>	評 定	評価基準	可否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合 格
評 定	評価基準	可否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合 格														
水準に達しない学生に対する対応	再試験を実施する。															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<p>歯科診療補助は歯科衛生士にとって臨床における主要な業務である。知識や技術を含めた高い専門性を理解することが重要である。</p>															
教 科 書	<p>歯科衛生学シリーズ「歯科診療補助論」 医歯薬出版 歯科医療における国際標準感染予防対策テキスト滅菌・消毒・洗浄 医歯薬出版</p> <p>歯科衛生学シリーズ「歯科機器」 医歯薬出版 歯科衛生学シリーズ「歯科材料」 医歯薬出版 第4版 イラストと写真でわかる歯科材料の基礎 永末書店</p>															
参 考 書																

授 業 科 目	歯科診療補助論 I 実習 必修 94 時間 (前期・後期)	担当教員	専任教員 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育 方針と概要	円滑な歯科診療補助を行うために知識・技能・態度を修得する。		
達 成 目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 使用頻度の高い歯科用器材の名称と使用目的を説明できる。 2. 使用頻度の高い歯科用器材を適切に取り扱うことができる。 3. 共同動作において、基本的な位置と姿勢をとることができる。 4. 安全かつ円滑な器具の受け渡しができる。 5. 頻度の高い処置の介助を適切に行うことができる。 6. 手指消毒の必要性と消毒法を説明できる。 7. 診療に用いる器具の滅菌・消毒を行うことができる。 8. スタディモデルの作成のための一連の作業を円滑に行うことができる。 9. 暫間被覆冠の作成のための一連の作業を円滑に行うことができる。 10. 歯科診療の補助を行うことができる。 11. 事後の注意を理解することができる。 		
授 業 計 画	<p>第 1 回 綿花作成 第 2 回 " 第 3 回 合着材練和 第 4 回 " 第 5 回 " 第 6 回 印象練和 第 7 回 " 第 8 回 石膏 第 9 回 " 第 10 回 バキュームテクニック 第 11 回 " 第 12 回 ワックス 第 13 回 印象採得① 第 14 回 " 第 15 回 印象採得② 第 16 回 " 第 17 回 復習 第 18 回 " 第 19 回 スタディモデル 第 20 回 " 第 21 回 デンタルセッティング 第 22 回 "</p>		

	<p>第23回 現像 第24回 復習 第25回 隔壁法（マトリックスバンド） 第26回 歯肉圧排法・ブローチ綿栓 第27回 精密印象 第28回 〃 第29回 ラバーダム防湿マニキン① 第30回 〃 第31回 ラバーダム防湿マニキン②、歯間分離法（エリオット、アイボリー） 第32回 〃 第33回 共同動作Ⅰ（コンポジットレジン修復法） 第34回 〃 第35回 共同動作Ⅱ（根管治療） 第36回 〃 第37回 共同動作Ⅲ（根管充填） 第38回 〃 第39回 共同動作Ⅲ（口腔外科） 第40回 〃 第41回 復習 第42回 〃 第43回 暫間被覆冠① 第44回 〃 第45回 暫間被覆冠② 第46回 〃 第47回 暫間被覆冠③</p>															
<p>履修上の注意</p>	<p>講義・実習を同時にして行うため、基礎知識を学びながら手技を体得する。 手技を得る科目であるため、毎時間を大切に臨む必要がある。 実技小テストを実施する（合格点に達するまで実施する）。 実習要項については、履修前に予習し準備品などもよく確認しておく必要がある。</p>															
<p>成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法</p>	<table border="1" data-bbox="595 1476 1281 1693"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85～100点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70～84点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60～69点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60点未満</td> <td>不 合格</td> </tr> </tbody> </table> <p>実技試験（実技小テスト、提出物の採点、提出日などを含む） 実習に関して、態度・言動・準備品不足なども評価の対象となる</p>	評 定	評価基準	合否の別	優	85～100点	合 格	良	70～84点	合 格	可	60～69点	合 格	不可	60点未満	不 合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85～100点	合 格														
良	70～84点	合 格														
可	60～69点	合 格														
不可	60点未満	不 合格														

水準に達しない学生に対する対応	再試験を実施する。
・ 関連する授業・演習・実験 ・ カリキュラム全体の中での位置付け	歯科診療補助の治療の内容や、用途にあった器材の準備や取り扱いなどの技術の習得や、チーム医療の一員としてのコミュニケーションスキルも学ぶ。
教科書	<p>歯科衛生学シリーズ「歯科診療補助論」 医歯薬出版 歯科医療における国際標準感染予防対策テキスト滅菌・消毒・洗浄 医歯薬出版</p> <p>歯科衛生学シリーズ「歯科機器」 医歯薬出版 歯科衛生学シリーズ「歯科材料」 医歯薬出版 第4版 イラストと写真でわかる歯科材料の基礎 永末書店 新・歯科衛生士教育マニュアル 「保存修復」 クインテッセンス出版 歯科衛生学シリーズ 「保存修復学・歯内療法学」 医歯薬出版</p>
参考書	

授 業 科 目	高齢者歯科学（講義） 選択 20 時間（後期）	担当教員	萩原 敏之 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	<p>超高齢社会に対応した歯科医学を修得する。すなわち、患者である高齢者の身体的・心理的特性および口腔の特性を理解したうえで、口腔のケアや歯科保健指導が行える知識を習得する。また、在宅、介護施設、病院における事例と歯科衛生過程とを関連付けることができるよう習得する。</p>		
達成目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者を取り巻く社会および環境問題について理解できる。 2. 高齢者の身体的・心理的特性について理解できる。 3. 高齢者の口腔状態および口腔疾患の特性について理解できる。 4. 高齢者の状態の把握ができる。 5. 高齢者の口腔ケアができる 6. 高齢者の摂食嚥下リハビリテーションができる。 7. 高齢者に関わる医療と介護の概要を説明できる。 8. 高齢者歯科において歯科衛生過程を活用できる。 		
授業計画	<p>1 年生時</p> <p>第 1 回 高齢者歯科と歯科衛生士の役割</p> <p>第 2 回 高齢者を取り巻く社会的問題、法制度</p> <p>第 3 回 高齢者の居住形態・施設および入院設備の特徴</p> <p>第 4 回 加齢に伴う身体的、精神・心理的变化</p> <p>第 5 回 高齢者に多い全身疾患および認知症について</p> <p>第 6 回 高齢者に多い口腔疾患</p> <p>第 7 回 高齢者の状態の把握、臨床検査</p> <p>第 8 回 高齢者の栄養状態、薬剤服用</p> <p>第 9 回 高齢者および有病高齢者への口腔ケア</p> <p>第 10 回 要介護高齢者への口腔ケア</p> <p>3 年生時</p> <p>摂食嚥下の評価と対応、誤嚥性肺炎予防のための訓練</p> <p>在宅、介護施設における摂食・嚥下リハビリテーション</p> <p>在宅医療制度、介護保険制度の概要</p> <p>多職種協働によるチーム医療について</p> <p>高齢者歯科における歯科衛生過程、事例研修</p>		

履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・出席は毎時間とるので無断欠席しないこと ・予習復習すること ・質問は積極的にすること 															
成績評価の方法 達成評価の基準、およびその方法	<table border="1" data-bbox="598 405 1283 618"> <thead> <tr> <th>評 定</th> <th>評価基準</th> <th>合否の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>優</td> <td>85 ～ 100 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>70 ～ 84 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>可</td> <td>60 ～ 69 点</td> <td>合 格</td> </tr> <tr> <td>不可</td> <td>60 点未満</td> <td>不 合格</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次の定期試験は筆記試験を行う ・3年次講義終了後は筆記試験またはレポート提出を課す ・定期試験の結果およびレポートにて成績評価を行う 	評 定	評価基準	合否の別	優	85 ～ 100 点	合 格	良	70 ～ 84 点	合 格	可	60 ～ 69 点	合 格	不可	60 点未満	不 合格
評 定	評価基準	合否の別														
優	85 ～ 100 点	合 格														
良	70 ～ 84 点	合 格														
可	60 ～ 69 点	合 格														
不可	60 点未満	不 合格														
水準に達しない学生に対する対応	定期試験の結果状況をもとに再試験やレポートを課す															
・関連する授業・演習・実験 ・カリキュラム全体の中での位置付け	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問歯科保健指導 ・病院歯科実習 ・摂食嚥下指導 ・高齢者歯科学は、ほぼすべての歯科臨床科目の上に学ぶべき応用科目である 															
教 科 書	歯科衛生学シリーズ「高齢者歯科学」 医歯薬出版															
参 考 書																

～歯科衛生士の誓い～

私たちは将来歯科衛生士として、歯科医師と共に、歯科疾患の予防および口腔衛生の向上のために、その任務を忠実に守ります。

ここに臨床の場にのぞむに当たり、とくに次のことを誓います。

1. 常に自分の最善の力をつくして歯科衛生の向上につとめます。
1. 技術をみがき、知識を吸収することにつとめます。
1. 常に勇気を以て自分の学んだことを実行します。
1. 公共の場所では調和を守り、十分な共同のもとに仕事をすすめます。
1. 診療の機会に見聞した患者さんの個人情報を守ります。

茨城齒科専門学校校歌

誓い

作詞 牧厚志
作曲 牧厚志

Musical score for '誓い' (Vow) in G major, 4/4 time. The score consists of 8 staves of music with lyrics written below the notes. The lyrics are: 水戸の城下 西南の 千波の湖上 風さやか 学びのわざを 磨きゆく 真理の道を 求めゆく 偕楽の梅 今香る 微笑みたたえ この胸の 愛しむ心 育み 友よ 明日の 夢をもて 那珂川のせせらぎ 水清く 溢れる 希望 満天の この青春の 輝きと 誓いし心 永久に

茨城齒科専門学校校歌

誓い

作詞 牧厚志
作曲 牧厚志

水戸の城下 西南の
千波の湖上 風さやか
学びのわざを 磨きゆく
真理の道を 求めゆく
偕楽の梅 今香る
微笑みたたえ この胸の
愛しむ心 育み
友よ 明日の 夢をもて
那珂川のせせらぎ 水清く
溢れる 希望 満天の
この青春の 輝きと
誓いし心 永久に

